

# 研究の概要

## 1 研究主題

### 主体的に学ぶ子どもの育成

～自ら課題を見つけ、見通しをもって解決しようとする力を育む授業づくり～

## 2 研究主題設定の理由

### (1) 今日の教育的課題から

現在、子どもを取り巻く環境は生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により急速に変化している。それを背景として、社会全体が子どもの人間関係形成能力や社会性の低下など深刻な問題に直面している。こうした状況を受けて、平成20年度から改訂・実施された現行学習指導要領では「確かな学力」「豊かな力」「健やかな体」をバランス良く育て「生きる力」の向上を目指してきた。本県においても自立した社会人の育成を目標に「問いを発する子どもの育成」を最重点の教育課題として掲げ「生きる力」の向上に努めている。

### (2) 本校における課題から

本校の教育目標にも「一人一人の社会自立を目指して、『生きる力』を育成する。そのため、全ての教育活動を通して、『交わる力』『つながる力』を育む」とある。また、育てたい人間像として「話のよくできる心豊かな人間」「進んで働き責任を果たすことができる人間」「友達と仲良くできる人間」「心身とも健やかな人間」の4点を挙げている。

こうした教育目標を達成するため、本校では平成25、26年度に「一人一人の学力の向上を目指した主体的な学びを引き出す授業づくり」を研究主題として授業改善に取り組んできた。子どもの確かな学力を育てることを目指し、学級やグループで話し合い、発表し合うなどの言語活動や、各教科等における探究的な学習活動等を重視してきた。

その成果として、以前より主体的に学習へ取り組むようになってはきたが、自信のないことには依然として教師の指示を待ってしまう傾向が見られた。そこで、多様な学習活動を展開したり、学び合いの力を育む指導を充実させたりしながら子どもの主体性を促し、学力の向上を目指していかなければならないことが課題として挙げられた。

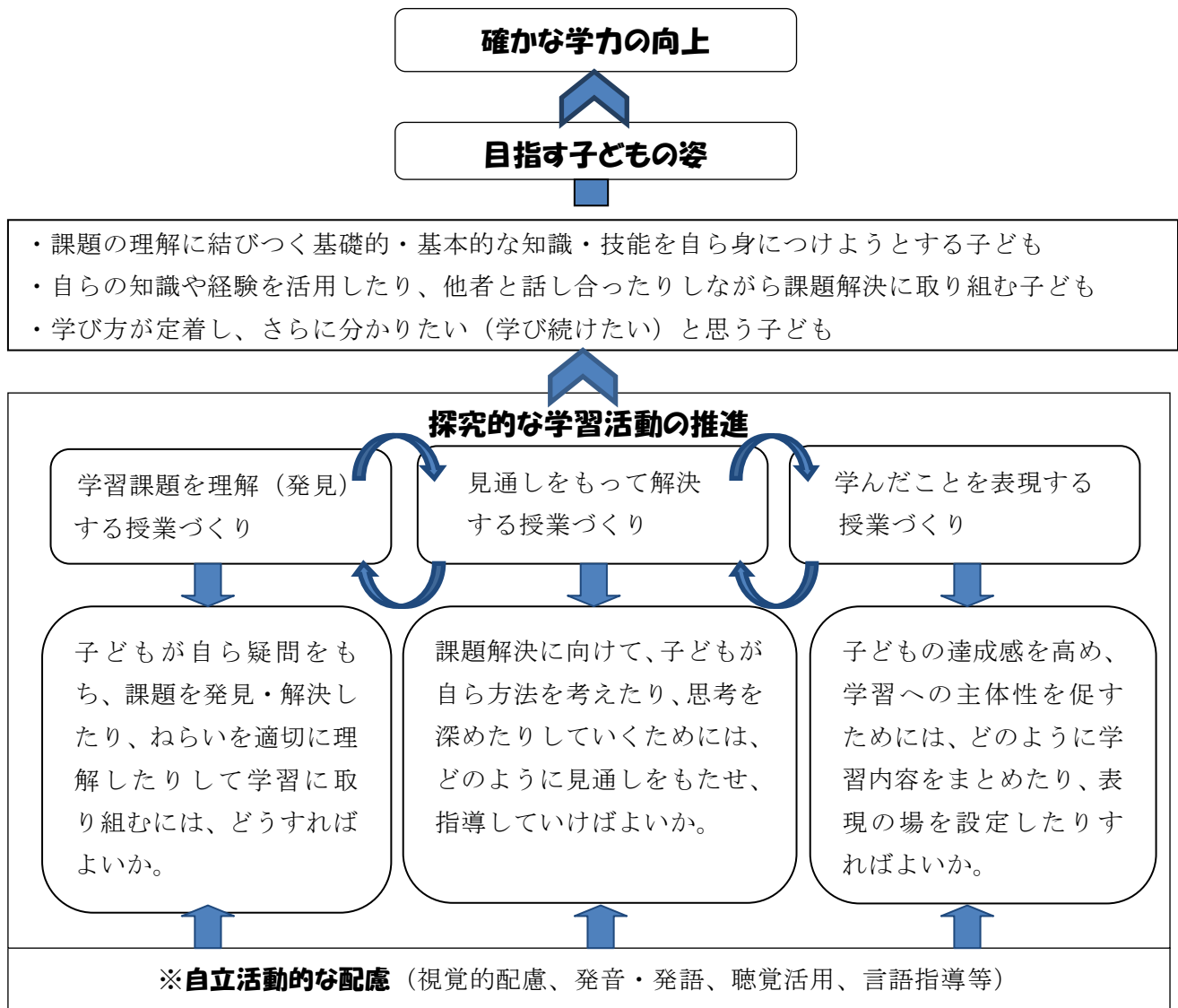
これらの課題を受け、平成27年度からは本研究主題を設定し、子どもの主体性をより一層高めるため、課題の発見及び解決に向けた学習活動の充実を図ってきた。聴覚に障害をもつ本校の子どもたちが、課題を発見・把握し、解決していく力を高めていくことは、変化の激しいこれからの社会を生きていくためにも必要なことである。これは、「初等中等教育における教育課程の基準の在り方について（諮問）」（平成26年11月20日）の中で「今後の学習指導には学びの質や深まりを重視し、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（アクティブラーニング）やそのための指導方法を充実させていく必要がある」とも述べられている。

そこで本研究では、主体的な学びを育む探究的な学習活動の中で「課題発見能力」「問題解決能力」の向上を目指すことで確かな学力を高めていきたいと考え、本研究主題・副題を設定することにした。

### 3 研究仮説

目指す子どもの姿を達成するために、次のような研究仮説を設定した。

日々の授業において、子どもが自ら学習課題を理解（発見）し、見通しをもって解決したり、学んだことを表現したりする授業づくりをすることで、子どもの主体的な学びが高まり、ひいては学力※が向上するであろう。※ここでいう「学力」とは現行の学習指導要領でいうところの「確かな学力」を指す



※平成28年度(2年次)から新たに加えた。

### 4 研究期間と研究計画

本研究は、平成27年度から平成29年度の3年間の継続研究である。ここには、平成29年8月現在までの研究の概要を記す。

- (1) 平成27年度(1年次)：子どもの実態把握と研究内容に基づく実践  
教師の指導技術向上のための研修等
- (2) 平成28年度(2年次)：1年次の評価と修正(学校全体及び各研究班)  
授業実践の蓄積

(3) 平成29年度(3年次): 2年次の評価と修正(学校全体及び各研究班)

具体的な手立ての検証

研究の経過報告(紀要発行)

研究の検証及びまとめ(3月の全校研究会にて発表)

## 5 研究体制及び組織

研究班は各学部に基づき、早期教育班、小学部班、中学部班、高等部班(普通教科グループ・職業教科グループ)、支援部班、寄宿舍班とする。支援部班は独自の研究主題、取組を実践した。寄宿舍班は研究主題、副題は同じとしたが、それ以降は実情に応じ変更可として進めた。

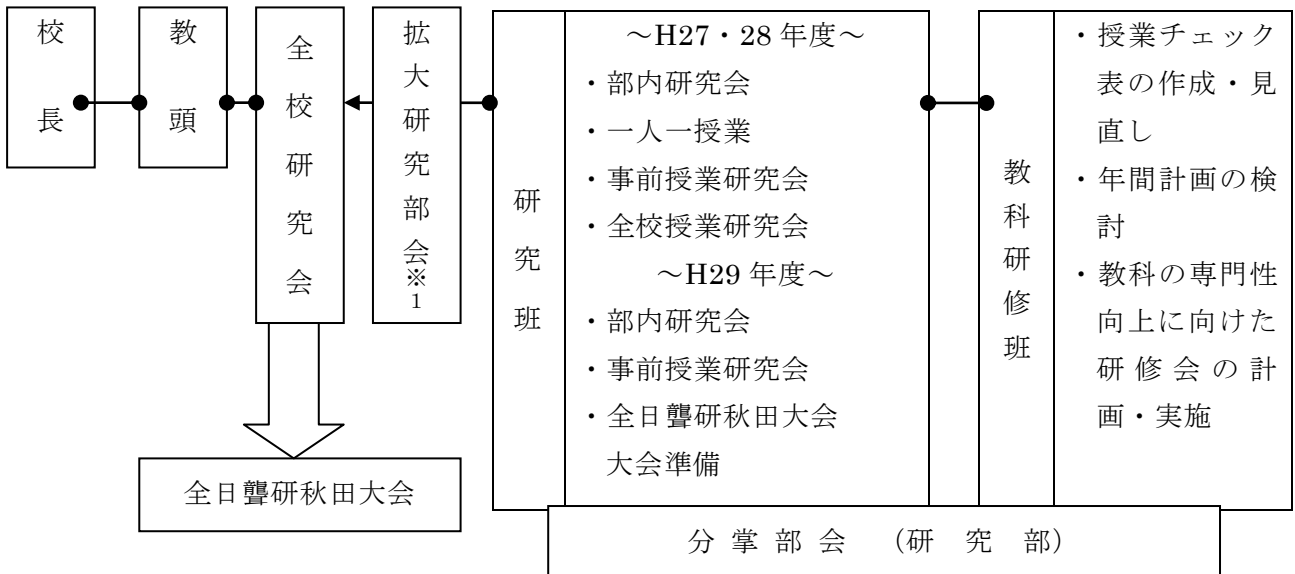
また研究班を支えるために、教科研修班を組織し、研究班を教科的側面から支援した。

(1) 研究体制

研究班						
早期教育班	小学部班	中学部班	高等部班		寄宿舍班	支援部班
			グループ 普通教科	グループ 職業教科		

教科研修班												
早期教育班	小学部班	中・高教科研修班								職業教科班		
		国語科班	算数・数学科班	理科班	社会科班	英語科班	音楽科班	美術科班	保健・体育科班	家庭科班	班 情報デザイン科	産業技術科班

(2) 研究組織図



「※1」は管理職、学部主事、研究主任、研究部で構成されている。

## 6 研究の方法

平成27年（1年次）は仮説にある3つの視点（P2仮説の下線部参照）を中心に授業づくりを行ってきたが、平成28年度からは、仮説の3つの視点及び「自立活動的な配慮」から、研究の方法を検討した。1年次から3年次までの研究の内容及び方法は、研究構想図にまとめた（P10）。詳細については「8 研究の経過」に記すこととする。

## 7 評価方法

各研究班は、以下の（1）から（3）の評価項目に基づいて評価を行うこととした。しかし、研究を進めるにつれて、学部の研究内容に即した新たな方法を取り入れて行っている班もあり、その詳細については本紀要の「各研究班の研究」に掲載している。

また、（2）については、「学力」は現行の学習指導要領でいう「確かな学力」を指しており、各学部で教科の定着度を計るテストだけではなく、（1）の項目も関係していると考えられる。

（1）主体性について

- ・教師による子どもの変容記録

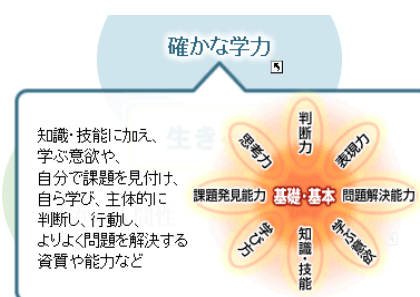
（2）学力について

- ・校内テスト（単元テスト、定期テスト等）
- ・標準化されたテスト（教研式標準学力テスト、言語性検査、各種検定等）
- ・振り返りシートやノートの記述内容

（3）授業づくりについて

- ・一人一授業提示とその研究会の実施
- ・授業研究会の実施（年5回の実施）
- ・授業研究会に合わせた全校自立活動研修会（年5回の実施）
- ・授業研究会に向けての事前授業研究会の実施
- ・授業チェック表の活用

### 〈「確かな学力」に基づいた各研究班の学力観〉



早期教育班	小学部班	中学部班	高等部班
思考力・判断力・表現力を育む。	思考の深まりを促し、自らの考えを表現する。	自ら考え思考を深めていく。表現する。	課題を理解し、知識技能を活用しながら解決することで課題解決能力を高める。

## 8 研究の経過

（1）平成27年度の取組

平成27年度は、主に教科の指導力向上に重点を置いて各研究班で取り組んだ。各研究班の成果と課題を通して、1年次の成果と課題をここにまとめた（P5①及び②参照）。

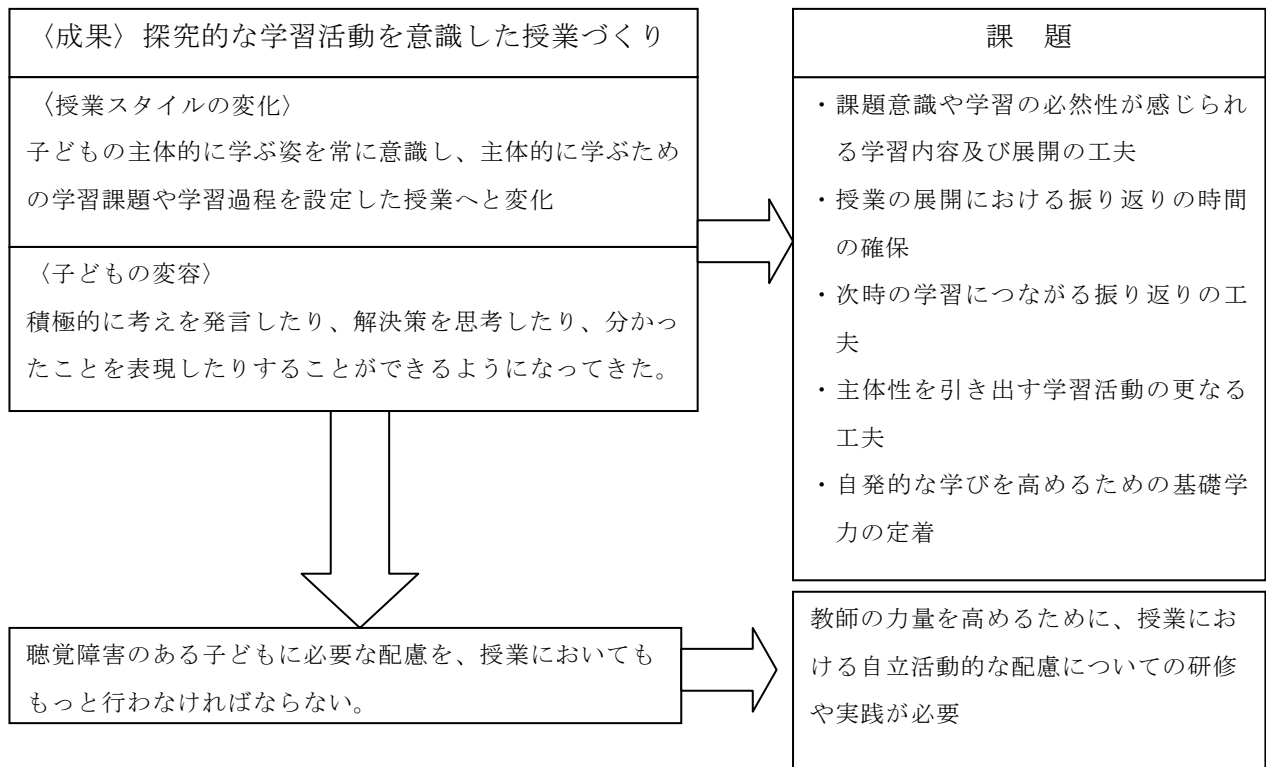
成果は、探究的な学習活動を意識した授業づくりの推進が、教師の意識の変化につながったことである。子どもの主体的な姿を各学部で設定し、その姿をイメージしながら学習課題や展開を考えることで子どもが主体の授業へと変化した。その結果、子どもが試行錯誤を重ねながら解決策を発見したり、自分の意見を根拠に発言したりすることを目指した授業づくりに取り組むようになった。

また、聴覚障害のある子どもに必要な配慮について、教師間で改めて確認することができたことも成果の一であった。聴覚に障害のある子どもにとっては、教科指導と言語指導のどちらも、学力を高めるには大切な要素である。そのためには、子どもに必要な配慮について、職員がより一層研鑽を積まなければならないということが、浮き彫りになってきた。

① 研究の内容と方法

<p>●研究の内容</p> <p>(1) 学習課題を理解するための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・単元構想の吟味や1単位時間の目標及び評価の明確化</li> <li>・導入の工夫（発問や教材等の提示の仕方）</li> </ul> <p>(2) 見通しを持って解決するための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習形態の工夫</li> <li>・教科等における問題解決の進め方の指導</li> <li>・思考が見える板書等の工夫</li> </ul> <p>(3) 学びを表現し自己の変容に気付くための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・まとめと振り返りの時間の確保と自己評価カードの工夫</li> <li>・子どもの発言を生かした次時へのつながり、まとめ方の工夫</li> <li>・教師による評価の工夫</li> </ul> <p>(4) 学習習慣の定着のための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学年に応じた学習の手引きの作成</li> <li>・家庭学習を定着するための工夫</li> </ul> <p>(5) 掲示の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習の跡が分かる掲示の工夫</li> <li>・子どもが使える（学習の手助けとなる）掲示の工夫</li> </ul>	<p>●研究の方法</p> <p>(1) 全校授業研究会</p> <p>全校を対象とし、グループごとによる協議、ワークショップを通し成果と課題を共有する。</p> <p>(2) 一人一授業提示</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・計画的に実施し、各研究班の推進状況の確認の場とする。</li> <li>・3校授業を語る会、ネットワーク構築事業等を活用しながら、他校の意見を取り入れる。</li> </ul> <p>※授業チェック表、ミニ協議会を通して指導技術の向上にも努める。</p> <p>（ミニ協議会は校長、教頭、学部主事、研究主任、自活主任も参加する。）</p> <p>(3) 全校研修会、出張報告会</p> <p>研究推進上に必要な最新情報、他校の取組について研修を深める。</p>
---	---

② 成果と課題



(2) 平成28年度の取組

これらの課題を受けて平成28年度は、平成27年度の研究の内容を項目にまとめ、研究内容と方法を整理した。また、2年次に取り組みたい内容を課題となったことを基に重点事項として取り上げ、学部で検討すべき研究方法の具体的な内容を示した。

仮説との関連		重点事項	具体的な方法
1	学習課題を理解（発見）する授業づくり	指導方法に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>主体性を引き出す学習内容及び活動の検討と実践</li> <li>課題意識や疑問を促すような手立ての工夫</li> <li>視覚教材やICT機器の活用の工夫</li> </ul>
2	見通しをもって解決する授業づくり	授業の構成に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>各学部の研究テーマを達成させる学習の流れ（過程）が明確である授業構成</li> <li>主体的な学習活動の場が設定されている授業構成</li> <li>次時の学習につながっていくようなまとめの時間が確保されている授業構成</li> </ul>
3	学んだことを表現する授業づくり	学習のまとめに関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>振り返りシートの内容の工夫</li> <li>振り返りシートの活用方法についての工夫（振り返りシートに代わるまとめ方の工夫）</li> </ul>
自立活動的視点からの授業づくり		板書計画に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>色の使い方、情報量は適切であるか、授業の内容が分かる板書であるか、子どもの思考を深めるやり取りにつながっているか。</li> </ul>
		学習環境の整備	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもが、自ら情報を収集できるような掲示の方法を各研究班で検討する。</li> <li>〈学部で統一〉 特別活動に関係した掲示</li> <li>〈学部での取組〉 行事に関する掲示</li> <li>言語に関する教材の掲示</li> <li>〈学部で検討〉 教材に関する掲示</li> </ul>

平成27年度の課題として、授業における自立活動的配慮の力量の向上が挙げられているが、聴覚支援学校での自立活動的配慮とは言語指導を始め多岐にわたる。言語指導に重きを置いた取組の大切さは、どの研究班でも日々の授業の中で実践を重ねているために、敢えて各研究班の共通項目でもある重点事項としては取り上げず、平成28年度は表中の2点（板書計画に関すること・学習環境の整備）を重点事項として、聴覚障害児に合った板書や掲示について再度検討することとした。これは「見通しをもって解決する授業づくり」にも通じる項目である。

① 教科の授業チェック表の活用について

各研究班の全校授業研究会では、指定授業に関して教科の授業チェック表（以下チェック表）を用いて、授業づくりの評価の一つとした。回収した枚数は、早期教育班6枚、小学部班7枚、中学部班と高等部班がそれぞれ16枚という結果であった（表1）。

これらの結果から、活用が伸び悩んだ原因を探る必要があることが分かった。そこで、チェック表の内容及び活用方法の2つの視点から教科研修班で話し合った結果、次のような改善策が挙げられた。

ア 内容について

- 授業アンケートとして活用するならば、自由記述の欄をもっと広げた方がよい。

- 単元ごとに見てもらえるように、単元名を記入する欄があればよい。

研究班	早期教育	小学部	中学部	高等部
回収数（枚）	6	7	16	16
職員（人）	48（教諭・臨時講師・実習助手）			

表1

イ 活用方法について

- ・チェック表の項目を年度当初に教師が読み、それを念頭に入れながら授業を行うとよい。
- ・良かった項目、改善が必要な項目を取り上げ、学部内や研修班内で共通理解する。

② 成果と課題

仮説との関連		重点事項	具体的な方法の成果（○）と課題（△）
1	学習課題を理解（発見）する授業づくり	指導方法に関する こと	○主体性を引き出す学習内容及び活動の検討
			・子どもの興味関心に合った題材を設定でき、意欲的に取り組む姿、試行錯誤できる姿、気持ちを表現してやり取りする姿を引き出した。
			○課題意識や疑問を促す手立ての工夫
			・自分の考えや理由を述べるという意識付けにつながった。
			○視聴覚教材やICT機器の工夫
			・見通しをもって学習する手助けとなった。
			・客観的に自分を見て周囲と比較したり、誤りに気付いたりすることができた。
2	見通しを持って解決する授業づくり	授業の構成に関する こと	○学習の流れ（過程）が明確である授業構成
			・学習の流れが分かり、課題解決や目標に迫りやすくなった。
			△主体的な学習活動の場が設定されている授業構成
			・導入部分を短縮し、本時にかかわる活動の時間を十分にとる。
			△次時の学習につながっていくようなまとめの時間が確保されている授業構成
			・知識や理解の定着を図るために、まとめを大切に次時につなげる。
3	学んだことを表現する授業づくり	学習のまとめに関する こと	△振り返りシートの内容・活用の工夫
			・子どもが自分自身を振り返る「振り返りシートは」子どもが納得して自己評価できるような評価基準が必要である。
			・表面的な数字や評価だけでなく、複数の目で見えて分析することが必要だ。
			△振り返りシートに代わるまとめの工夫
			・ねらいに合った内容を検討する必要がある。
自立活動的視点からの 授業づくり		△板書計画に関する こと	・目的に応じた活用の工夫が必要である。
		○学習環境の整備	・分からないときに何を、どこを手掛かりにするかが分かり、自ら学ぶ姿につながった。 ・学習活動に見通しをもつことができ、主体的な活動につながった。教室や廊下の掲示について見直す機会をもつことができ、視覚情報を整理することができた。

以上のことから、平成29年度に取り組むべき課題を以下にまとめた。

ア 仮説に基づいた具体的な方法の再検討

- a 【仮説】「見通しを持って解決する授業づくり」
- ・適切な時間配分やまとめの充実（まとめの時間の確保やまとめ方の検討）
- b 【仮説】「学んだことを表現する授業づくり」

・振り返りシートの内容と活用方法

イ 評価の検討

- a 主体性を評価するための子どもの変容の記録の観点
- b チェック表の見直し

主体性を評価するために、より具体的な観点を考える必要があることはイのaにある通りだが、その他に授業づくりの評価として活用してきたチェック表についても、改善策が挙げられていた。その改善策を、平成29年度は教科研修会で再検討し、活用につなげていくこととした。また、各研究班の考える確かな学力観が、主体性の捉えと関連することが研究を進めていく中で明確になってきた。よって学力と主体性の評価方法を明確に分けることは難しく、その評価の在り方についても、整理する必要があることが分かった。

③ 全校授業研究会及び全校自立活動学習会の様子

ア 全校授業研究会の様子

例年、全校職員が参加し、KJ法を取り入れたワークショップ形式の授業研究会を年に5回実施している。黄色の付箋紙は成果、赤の付箋紙は課題とし、各研究班の協議会の視点に合わせてワークシートに貼り、授業の改善に向けて話し合う。



図1 授業研究会の様子：各グループで話し合った内容を張り出し、参加者全員で見合っている。

イ 全校自立活動学習会

平成28年度からは、自立活動部による全校自立活動学習会で、全校授業研究会で提示された授業に基づいた「授業における自立活動的配慮」について具体的な手立てを検討し、研鑽を積んだ。

右の図は、授業中の教師と生徒のやり取りを文字に起こし、ワークシートにしたものである。生徒が考えたことを文章で説明するための、教師の

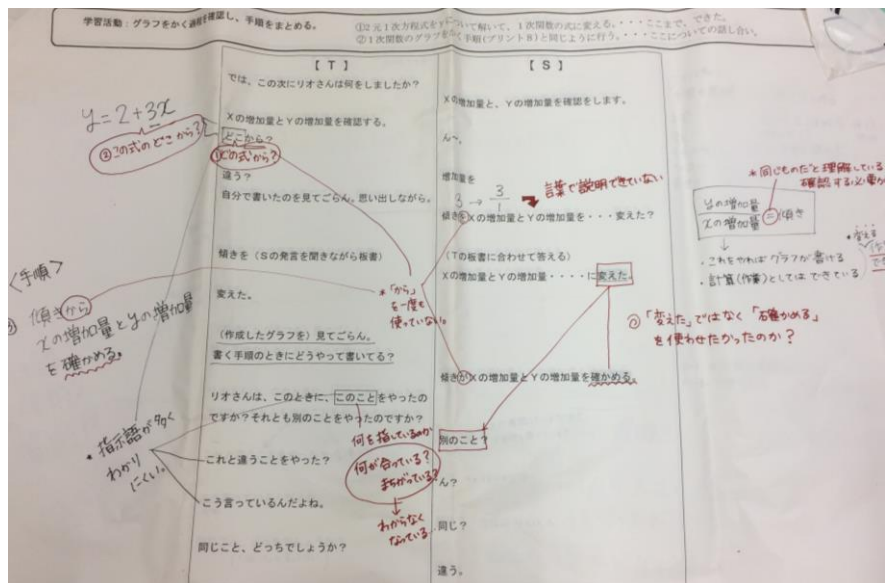


図2 某グループのワークシート

発問及び働き掛けについて、グループで検討した。



### (3) 平成29年度の取組

前年度の課題を受けて、平成29年度は以下の2点を中心に取り組んでいる。

- ① 仮説に基づいた授業づくり
- ・子どもの主体的な活動を十分に確保した授業構成
  - ・まとめの時間の充実
  - ・振り返りシートの内容の吟味

② 評価方法の見直しと実践

ア 主体性の評価

- ・子どもの変容を捉えるための評価方法の検討と実践
- ・学力の評価
- ・評価方法の検討と実践

イ 授業づくりの評価

- ・教科チェック表の見直しと活用

平成28年度までの研究では、仮説である「学習課題を理解（発見）する授業づくり」に力を入れて取り組んできた。その中でも主体性を引き出す学習内容及び活動内容の検討・実践に関しては、子どもが自ら考える、行動するなどの成果が見られた。また発問の工夫では、子どもが疑問をもったり、自分の考えを改めて考え直したりするなどの変容が見られている。

しかし、実践していく中で、子どもが主体的に活動する場を設定することで、まとめの時間が十分に取ることができないことや、まとめの際に行う振り返りシートの記入に時間が費やされ、授業が時間内に終わらないということが課題として上がってきた。これらの課題は、仮説の「見通しを持って解決する授業づくり」「学んだことを表現する授業づくり」に関連した項目である。そこで平成29年度はこれらを継続・発展させて取り組むこととした。その実践の課題と成果を今後まとめて、3年間の研究のまとめとする。

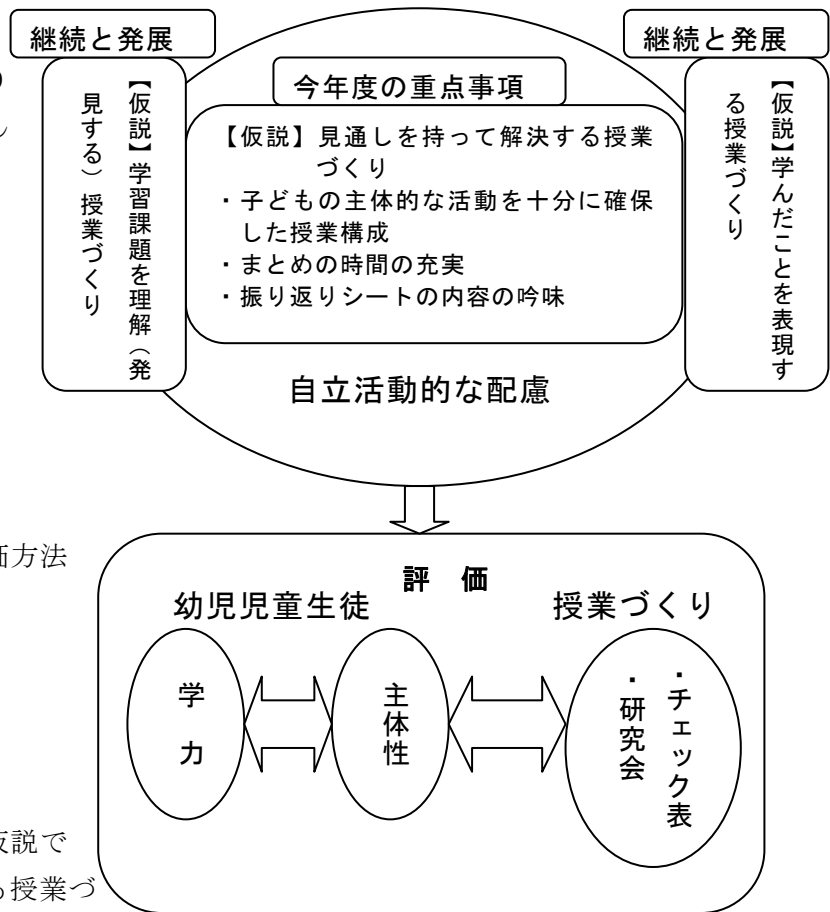
しかし、実践していく中で、子どもが主体的に活動する場を設定することで、まとめの時間が十分に取ることができないことや、まとめの際に行う振り返りシートの記入に時間が費やされ、授業が時間内に終わらないということが課題として上がってきた。これらの課題は、仮説の「見通しを持って解決する授業づくり」「学んだことを表現する授業づくり」に関連した項目である。そこで平成29年度はこれらを継続・発展させて取り組むこととした。その実践の課題と成果を今後まとめて、3年間の研究のまとめとする。

## 9 今後の研究の方向性と課題

平成29年度は、3年研究の最後の年である。今後は各研究班からの報告を分析し、学校研究の検証を行っていく予定である。また、新学習指導要領が平成30年度から幼稚園を皮切りに順次実施される。アクティブラーニングを汲むこの流れは、本校の探究的な学習活動と重なるところも多いが、「主体的・対話的・深い学び」を在籍数が減少する中、少人数で効果的に行うための方策を本校でも今後検討していく必要がある。

### 【参考文献】

「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について（答申）」（平成15年10月 中央教育審議会）／「初等中等教育における教育課程の基準の在り方について（諮問）」（平成26年11月20日中央教育審議会）／学校教育の指針 平成28年度の重点（秋田県教育委員会）／平成23年度研究紀要43集（秋田県立豊学校 平成27年発行）



全体研究構想図

